

県民に親しまれる大学をめざして



前富山県知事 中沖 豊

1 知事初仕事としての誘致活動

私は、人づくりこそが県づくりの根本であるとの信念に立って、全力を尽くしてきました。この間、学校施設や運動場などを積極的に整備すること、発達段階に応じた特色ある教育や生涯学習を推進すること、美術館や文化ホールなどユニークな教育文化施設の整備などを進めてきました。

また、私は、若者の定着と流入を促進し、活力ある地域づくりを進めるためには、高等教育機関の整備が極めて重要であると考え、県内大学の整備に努力してまいりました。

私が知事に就任した当時、高岡市にあった富山大学工学部を富山市五福へ移転することや、その跡地に産業短期大学を設置することなどを盛り込んだ構想が進められていました。私は、かつて県の教育長をしていたこともあり、かねてからこの構想に高い関心を持っていたところでもあります。

11月11日に初登庁した私は、早速、同月24日から、堀高岡市長とともに、国に創設準備費の昭和56年度予算への計上を陳情しました。甲斐あって準備費は予算化され、翌年4月には、富山大学の中に「短期高等教育機関(高岡)創設準備室」が設置されました。私の知事としての初仕事は、高岡短期大学の開設に向けた、この確実な第一歩を刻むことであったわけです。

2 開学決定までの苦難

次の課題は、創設費の国予算への計上でした。私は、国に対し、高岡市二上地区に立地してほしいこと、富山大学工学部移転後の跡地は県及び高岡市で譲り受けたいことを申し出ました。しかし、当時は、臨調第一次答申において大学や学部の新増設は原則見送ることとされるなど、大学の新設には大変厳しい逆風が吹いており、結局、昭和57年度予算への創設費計上は見送られてしまいました。

高岡短期大学が実現するか否かの大きな節目となったのは、昭和57年度の国立大学統合整備等連絡協議会でした。全国の短大を統廃合するという大きな流れの中で、高岡短期大学の新設は、極めて厳しく予断を許さない状況でした。そうしたなかで、私は、二上地区での用地の確保、インフラ整備への協力、大学を支援するための財団の設立等を確約し、地元の熱意を強く訴えた結果、同年8月の協議会で念願の短大設置が決定されました。このときは、地元の熱い要望がようやく実ったと、関係者の喜びもひとしおでした。そして12月には、関係の国会議員の協力などもあり、昭和58年度予算案に開学経費が計上されました。また、翌年3月には国立学校設置法の一部を改正する法律が公布されました。これにより、高岡短期大学の昭和58年10月の開学と昭和61年4月からの学生受入れが、正式に決定されたのです。ここに至るまでには、国会議員の先生方をはじめ大変多くの皆さんのご尽力とご協力をいただきました。

3 地元の期待

高岡短期大学には、地域に開かれた新しい形の大学、いわゆるコミュニティ・カレッジとして、地域社会の活性化、本県の産業や文化の振興など幅広い分野にわたり、各方面から大変大きな期待が寄せられていました。このため、地域の産業と連携した学科構成、社会人受入れのための推薦入学制の導入、民間からの教員の登用、試験研究機関や民間との共同研究など、地域に根ざし、県民に親しまれる大学となるよう、県からも様々な提案をしました。

例えば、学科構成については、当初は、産業工芸学科、産業経営学科、国際教養学科の3学科体制とされていましたが、私は、来るべきIT時代の到来を見据え、最先端の設備機器を利

用する情報学科が是非とも必要であると提案し、産業情報学科という方向へ結実していきしました。

また、国際教養についても、これからの時代には実用的な外国語の能力が必要になると考え、文学中心ではなく、ビジネス外語を主とした学科とされるよう提案しました。

こうした地元としての期待が次々に盛り込まれ、昭和58年2月に、2学科7専攻2コースという最終的な基本構想が取りまとめられたことは本当に嬉しいことでした。

4 財団法人高岡短期大学協力会の設立

文部省に約束した協力の一つに、大学を物心両面から支える財団の設立がありました。

国の厳しい財政状況のもと、この大学を真に魅力あるコミュニティ・カレッジとして発展させていくためには、教育研究に必要な図書や実験・実習設備の整備に地元の協力が欠かせません。

このため、県や市町村、民間が参画し、開学直前の昭和58年9月に、財団法人高岡短期大学協力会が設立されました。当時の金利は6%弱でしたので、毎年継続的に2千万円程度の支援を行うため、総額3億円の寄付を募ることとしました。県や高岡市をはじめ各市町村が全面的に協力するとともに、民間企業からの寄付募集にあたっては、三協アルミ工業株式会社の竹平政太郎会長をはじめ地元高岡市の皆さんや富山県商工会議所連合会のご協力をいただき、募金活動が活発に展開されました。

5 開学から学生受入れへ

そしていよいよ、昭和58年10月、高岡短期大学が開学しました。横山保初代学長のもと、施設整備や教育課程の編成など学生受入れに向けた諸準備が進められることとなりましたが、厳しい財政状況を反映し、国の予算や定員措置はとても十分なものとはいえませんでした。このため、柳田富山大学長や横山学長と協議のうえ、優秀な県職員を大学事務局へ派遣しました。

また、地域に開かれた大学とするため、「富山県、高岡市及び高岡短期大学との連絡会議」を設け、施設計画や教員配置計画、カリキュラム、開放センターの位置づけ、学則の規定などについて、県からも随分多くの提案をさせていただきました。こうした地元の意向を十分反映されたからこそ、今日の高岡短期大学の姿があるのだと思っています。

横山学長も、地元のサポートがなければ大学は育たないとの思いから、昭和59年に、高岡市と富山市で懇談会を開催し、地元の意向把握に努められたのであります。

このような努力が実を結び、高岡短期大学協力会には、2年間で目標の3億円の募金が寄せられました。この多額の資金をもとに、現在まで支援を続けることができたのは、県民、企業、市町村のこの大学に対する期待の大ききの表れだと思っています。

昭和60年4月、講義研究棟の起工式が高岡市二上の地で執り行われました。まさに紆余曲折を経て設置が決定されたこの大学が、学生の受入れに向けて着実に整備されていることを感じ、胸を熱くした瞬間でした。

6 3大学統合に向けて

今、高岡短期大学、富山大学、富山医科薬科大学では、3大学統合に向けた準備が進められており、例えば、この高岡短期大学は4年制の芸術文化学部として生まれ変わろうとしています。

今後とも、①地域に根ざした大学として、県民に親しまれる交流拠点となること、②県内芸術文化団体など関係機関や団体との連携を密にし、多くの皆さんの期待に応える大学となること、③環日本海時代の到来などを踏まえ、対岸地域をはじめ世界各国との交流・連携を深め、世界に貢献する大学となることなど、常に高い理想を掲げ、その実現をめざし、世界に冠たる大学として大きく発展されることを心から願っています。

これまで一生懸命に取り組んできました私たちとしましても、この大学の限らない発展を願ってやみません。高岡短期大学の大飛躍を心からお祈り申し上げます。

高等教育機関に寄せる 高岡人の熱き思い

前高岡市長 佐藤孝志



国立高岡短期大学のことを見聞きする高岡の人たちは、誰しも此の地にあった素晴らしい学校とその学生たちについて、懐かしい思い出を持っていることであろう。

私の場合は、戦争中の勤労奉仕で、農作業の手伝いに来ていた多くの学生さんが我が家で昼食をとり、幼児の私に夫々のお国言葉で話して貰ったことである。今考えてみれば、大正13年からあった高岡高商か、昭和19年に転換されたばかりの高岡工専の学生さんであったのだろう。戦後その学校は富山大学工学部となったが、此の地に高等教育機関のあることは、昔から商業・工業の町ではあるが、学問・文化も大事にして来た我が高岡人の大きな誇りであった。

私は小学・中学・高校と進み、この大学の前を通る際には、いつも伝統を感じさせる趣きのある校舎・官舎群、美しいポプラの並木道、また、構内やグラウンドにいる大勢の学生さんの姿を目にして、自然と大学なるものに進みたいとの向学心を誘われて行ったように思う。そう言えば、並木道の一部は今も残っていて、大学跡地に建てられた高岡高校の現校長は、テレビドラマ「冬のソナタ」に出て来る例の並木道のような並み木が本校にもあると、ユーモアたっぷりに話しておられる。

その後、大学生・社会人として故郷を離れていた頃、私が高岡出身と告げると、時に自分も高岡高商や高岡工専で学んだと言って、昔の高岡のまちのことを懐かしげに話してくださる学者や会社の幹部の方々にお会いして嬉しく思ったことがしばしばあった。

ところが当時の堀市長（ご自身が高岡高商第一回生でもあった。）を始め高岡を挙げての存続要望にもかかわらず、富大工学部が富山市内に移転統合させられたのは誠に残念なことであった。国立大学のキャンパスの分散例はいくらかもあり、例えば彦根市には高岡高商と同じ歴史を辿った彦根高商が滋賀大経済学部として、また、浜松市には浜松工専が静岡大工学部として夫々残っている。いずれも高岡市と同じく県内第二の都市である。

このような事情と地元の意向も考慮されてか、幸い高岡には国立高岡短期大学というユニークな大学が設置されるところとなり、私は市長就任直後の昭和63年夏に、この大学のデザイン性に優れた立派な学舎と学長を始めスタッフや学生たちの意欲あふれる姿を拝見し、胸を撫で下したものであった。

そういうこともあって、高岡短大のいろいろな事業に市として出来る限りのご協力を惜しまず、勿論厳正な試験を経ての同大学卒業生の市職員への採用、進学希望のある市職員の同大学への留学派遣などを行って来たり、市政やまちづくりのための企画立案に際して、多くはそのための委員会・審議会の正副委員長や委員に同大学の先生方にご就任していただき、数多くの貴重なご助言を得たりした。個別の問題のご相談などで先生方の門を叩いたことも数限りない。そして嬉しいことには、大学自身が「広く地域社会に開かれた大学」を建学の精神として、公開講座、共同研究などを通じて、地元の住民や企業などに多大の恩恵を与えて下さっている。

市長の仕事の大事なものに、市内の各地域の住民、各界各層の人々などから、市政やまちづくりについてのご意見やご要望を伺うことがあるが、そのような場では、「高岡短大の四年制を」という声が数多く出された。二年間の修業期間では社会が必要とするレベルの技術・技法を中々習得出来ないのではないかという現状論から、今後の超少子化時代における大学間の激しい競争や女性の四年制大学志向の高まりの下では、二年制で女子学生の割合が極めて高い大学は生き残れないのではないかの懸念まであった。

そのような声が高まって来たことから、私たちは大学にとって第三者的立場に立つものであるが、私の市長三期目の平成9年に、県西部の市の代表、商工会議所、産業経済界の有識者など15人からなる「国立高岡短期大学の四年制移行を考える懇談会(会長高岡市長)」を設置した。

県内企業・高校進路指導主事・高岡短大在学生・同卒業者に対するアンケート調査、当時の蠟山学長からのお考えの拝聴、高岡短大をめぐる各種資料の詳細な分析などを基に、何度も意見交換を行い、平成11年に、様々な形の四年制移行を要望する旨の提言を行った。その中では、高岡短大当局の専攻科の一層の充実、大学の名称からの「短期」の削除などの実質四年制化のお考えも、四年制移行への前段階の方策として、これを地元としても支援することとしていた。

この提言が出された直後、私は高岡短大はもとより、富山県や文部本省に本提言を持参し、それぞれ要望を行なったが、その折りの反応は、趣旨として理解出来るものの実現は難しいというものであった。残念なことであったが、国立の短期大学という国にとって例外的、実験的な機関を国自ら改組する訳には行かないし、大学内部には現在の教授スタッフが四年制化のための有資格審査をどの程度クリア出来るかの問題があったのではないかと憶測している。

このたび、関係者の熱心なご検討を経て、高岡短大の現在の学科を残したままでの四年制化ではないものの、県内国立三大学の再編統合の中で、新しい理念に立った学部である「富山大学芸術文化学部」が現高岡短大のあるキャンパスに設置されることとなった。その意味では、私たち高岡人の四年制大学の要望が形を変えて実ったもので、嬉しく、かつ、ありがたく思っている。

およそ芸術・文化のことを学ぼうとする全国の有為の若者は、何よりも高岡の大学へ行かなければならないという程の存在価値の高い学部になり、この大学とその教授・学生の皆様が高岡を始め県西部の人々に親しまれる学問・文化の交流の場となることを期待している。そして、地元の産業経済界、市民、行政を挙げて、この新しい大学学部に出来る限りの支援がなされることを切に願っている。

「たかたん」と私

理事 荒井公夫



昭和33年春大学を卒業した私はそのまま東京で就職し、ずっと故郷高岡とは折々に帰省はするものの略無縁の生活を送っていました。その高岡へUターンして、所謂エンジニアリング系の小さな会社を創設したのが昭和47年の春、36歳になったばかりの頃でした。会社員時代は人間関係も限られ、又何度も転勤があったりして、自分の住む地域社会のことなどしっかり考えて見たことなどありませんでした。

しかし高岡で新しく会社を立上げたとなるとそうは行きません。地域社会と多様な繋がりを持つことがビジネスチャンスの拡大にもなるのではないかと考え、高岡青年会議所に入会しました。私にはJCでの活動は新鮮で、宝の山の中に居るようでした。国内各地での生活体験や当時としては機会の少なかった異文化に触れた経験などを活かして、主として街づくりや文化創造の分野で、市当局や商工会議所に様々な提案をしていました。その中の一つが富山大学工学部の富山市五福への移転後の高岡での高等教育機関をどう考えるか、という極めて大きな問題でありました。今想えば高岡短大とのご縁の始まりです。

私は高岡市の米国の姉妹都市であるインディアナ州フォートウェイン市をその頃すでに何度か訪れていましたが、同市にあるIUPUI・FW校(インディアナ大学パデュー大学フォートウェイン協同校舎)を視察して、これは地方都市におけるコミュニティカレッジの素晴らしい在り方だなと感じ、高岡で懸案となっていた国立高岡産業短期大学(当時)の学科と地域との関連性を考える上でおいに参考になりました。

お陰さまで新会社の経営も軌道に乗り始めた昭和58年5月、私自身思ってもいなかったことが起きました。高岡市の助役に就任することとなったのです。市政運営に民間の経済人の感覚と手法を取り入れたいとの市長の主旨だったようです。その頃新大学問題は、場所も初代学長の人事も開学時期も決まっており、学科とその内容については未だ最終決定していませんでした。特に情報系と語学系は時代や地域のニーズに対応すべくカリキュラムを充実させなければならないと思い、富山大学にあった準備室に横山先生を訪ね、意見交換を何度かさせて頂きました。

そして昭和60年4月11日本学の新営工事安全祈願祭が現地で挙行され私は市助役として列席いたしました。瀟洒なキャンパスが完成し、翌年4月15日に本学第一期生の入学式が行なわれました。

日本中何処にもない、地域に開かれたユニークな短大は「たかたん」の愛称で市民に親しまれ、親しみやすいキャンパスの中での開放センター諸活動や産学交流も成果をあげてきました。昭和63年5月市助役退任後再び経済界に戻った私は、程なく高岡商工会議所副会頭となり、今度はその立場で短大と接することとなりました。万葉線の存続が議論されたときの故蠟山学長の力強いご発言は、存続の決定打となりました。

その小ささが逆に大きな力となっていた我が国立高岡短期大学は創設20年を経て本年10月新富山大学の芸術文化学部となりますが、建学の精神は永く継承されると信じています。

国立高岡短期大学の思い出



高岡商工会議所会頭 南 義弘

昭和39年に、富山大学工学部が富山市五福キャンパスへ移転する事が発表されて、以来、高岡市から、国立の高等教育機関がなくなると云う事で、大変な騒ぎになりました。

昭和50年代に入り、国立の4年制大学の開設は、困難と云う事で、当時としては、ユニークな「コミュニティ・カレッジ」構想による、国立高岡短期大学の開設が決まりました。

そして、高岡地域のニーズに応え、地域の産業、福祉、文化の向上発展に寄与する事といった機能を併せもつことを目的に「高岡短期大学」として、地域に開かれた、特色ある新しい短期大学が、昭和58年10月、めでたく開学いたしました。

私、自身、千葉工業大学の第1回の卒業生であり、昭和35年監事になり昭和36年より、現在まで、ずっと理事を務めております。

大学経営に参画して、いろんな面で大変苦勞いたしました。幸い、現在では、大学院を備えた、学生一万人規模の工業大学になっております。

このような関係で、高岡での大学設置について、大変興味を持っておりました。

奇しくも、平成元年7月、私が、高岡商工会議所の会頭になりましてから、地場産業である高岡銅器や高岡漆器の振興や高岡クラフトコンペの運営、また、高岡のものづくりのデザイン開発にも大学のご協力を頂いて参りました。

歴代学長の横山保先生、宮本匡章先生、今は亡き、蠟山先生、そして現在の西頭学長さんとも親しくお付き合いをさせていただいております。

今迄、テレビ放送公開講座「身近なコンピューター」「木からのメッセージ」「いま、みつめよう国際化」「デザインの時代」等の講座をシリーズで、一般県民にもわかりやすく、放映され、大学開放センターの機能を遺憾なく発揮されました。

最近では、日仏景観会議の開催、また伝統産業界と連携した地場産業活性化事業や実践的なものづくり教育などにご尽力されており、経済界といたしましても敬意を表するとともに大変感謝しております。

「地方の時代」「自助努力」の言葉のように、国立大学の独立行政法人化、そして、国立大学の合併が進められておりますが、高岡短大も、今年10月より、富山大学芸術文化学部として、再出発することになっております。

少子高齢化社会を迎え、各大学は、地域に愛され、**魅力**ある、信頼される大学にしなければ、大学経営もうまくいかないでしょう。

正に、21世紀の大学経営は、産業界の経済原理と同じように、大競争時代に入ったと言えます。

二上山を仰ぎ見る抜群の教育環境のこの地で、芸術文化の旗印のもとに相集い、芸術文化を極める工芸家や芸術家の輩出する最高学府「芸術文化学部」になり、最高の勲章である「人間国宝」と呼ばれるような芸術文化人が、生まれることを心よりご期待申し上げます。

この上は、高岡市の伝統産業である銅器・漆器の振興と、あと4年で開町400年の高岡には国宝瑞龍寺を始め、たくさんの観光資源を持っております「商工観光都市高岡」が、大学のご指導を頂きながらますます発展する事を念じているところであります。